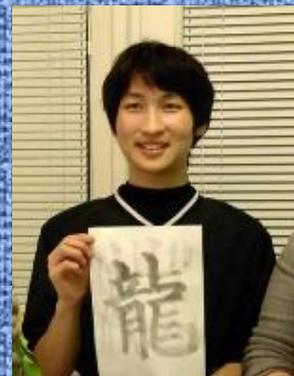


埼玉育ちのグローバル人

書道とユーゴスラヴィアを愛した留学
～大国と小国それぞれで感じた“違い”とは?～

第2回 「I love “YUGO” ～東中欧をすべて
巡ってわかったいまのユーゴ諸国～」

平成30年度「埼玉発世界行き」奨学生 柳沢 甫



～3回の長距離旅行～

私は留学中によく旅行をしましたが、中でも中東欧すべての国を回るという目標を立てていたため、それを達成するため3回の長距離旅行をしました。

- ① モンテネグロ・アルバニア・マケドニア・コソボ
- ② クロアチア・ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ・セルビア
- ③ ブルガリア・ルーマニア・モルドヴァ・沿ドニエストル・ウクライナ・ポーランド(旧ユーゴではないので割愛)

～1回目の長距離旅行～

最初の長距離旅行は、バルカン地域を巡りました。スロベニアはヨーロッパの中央に位置しているため、バスでたくさんの国を巡ることが出来ます。スロベニアはバルカン地域の中で、最も安全で経済発展している国だと強く感じた旅もありました。最初に行ったモンテネグロの首都ポドゴリツァは、旅行者の間で「何もない首都」と言われているだけあり、とても閑散としていました。モンテネグロは約10年前までは、セルビア＝モンテネグロという国でした。しかし独立後は思うような経済発展も遂げられなかったことが街の空気から感じ取ることができました。治安は比較的安定していて、物乞いやホームレスの人々も見当たりませんでした。

次にアルバニアへ向かいました。ポドゴリツァ

からティラナまではそんなに遠くはなかったですが、ティラナに向かう郊外には屋根のない家や窓のない家などが沢山あり、貧富差が激しい国なのだなと感じました。アルバニアは日本と同様、エンベル・ホッジャによって鎖国し、また鎖国後には国民の半数がねずみ講にかかった国でもあります。ティラナに行くととにかく若者が多かったです。客引き・物乞いが多かったですが、とても近代的な建物が立ち並びエネルギッシュな国として印象に残っています。現地ではアルバニア人の友達がティラナを案内してくれて、その中で様々な歴史や特有のナショナリズム（この国はすさまじいものです）について教えてくれました。

アルバニアからマケドニアへは格安バスを予約しました。しかし実際は8人乗りのバンでした。これで約9時間、乗客はみなアルバニア人。またこれもいい経験でした。中でも興味深かったのは、マケドニアでの国境付近でのことです。アルバニアとマケドニア両者は以前から対立しています。なので、両国のボーダーチェックはとても厳しく、車も隅々までチェックされ、越境すると大音量でアルバニア音楽を流し始め全員が両手でスカンデルベルグの鷲を模って「アルバニア」と叫んでいました。これには圧倒されました。マケドニアでは財布を盗まれ、大変な目に。また英語を話せる人がおらずとても苦勞しました。スコピエはこじんまりした街でしたが、ストリートチルドレンの姿をよく見ました。

財布が盗まれ、偶々スコピエにいた友人に借り

た50ユーロを手に、どうしても行きたかったコソボへ向かいました。コソボというと日本人は少しネガティブなイメージを持っているかと思います。しかしそんな予想を覆すほど、都市整備はされていました。しかし裏路地は露天商が蔓延っていて、少し気味が悪かったです。これからの経済発展が見込める国でもありましたが、人々は隣国セルビアからの独立を求めているため、政治活動する人々の姿がよく見受けられました。

これらの訪れた国は少しネガティブ要素が強いイメージがありますが、遠い日本の文化に興味を持っている若者が沢山いて、こういった国々ともより良い関係を築き続ける必要があるなと痛感しました。



プリシュティナのモニュメント

～2回目の長距離旅行～

2回目の旅行は、6月中旬にボスニア＝ヘルツェゴビナとセルビアへ旅行しました。はじめにサラエボに行きました。ボスニア紛争から20年以上経ちますが、建物の至るところに銃弾の跡が生々しく残っているものがあり、「あの紛争とは何だったのか」と考えさせられる場所でした。そしてスプレニツァツアーのコンダクターが当時の紛争について説明してくれました。コンダクターさんの母が目の前で銃弾に倒れたことや、隣の家が爆撃された話、軍隊として戦った話、戦死した友人兵士を葬ることができずに生きている罪悪感を話してくれるうちに、私自身も胸が痛くなると同時に「ユーゴスラヴィア研究、紛争研究について勉強する」という確固たる決意をした瞬間でもありました。

サラエボを歩いてみると、紛争の面影なくたくさんの人々で賑わっていました。またイスラム人街へ足を運ぶと、異国情緒あふれる雰囲気が漂っていました。

そしてクロアチアを經由して、セルビアのベオグラードへ向かいました。ベオグラードはかつてユーゴスラヴィアの首都として繁栄したところでもあります。名門のベオグラード大学には日本語学科が設置されており、日本語を話せる学生も多数いました。スロベニアの留学先でもベオグラード大学からの留学生がいて、彼も日本語を流暢に話していました。街並みは中世・近代の面影を残す一方で、NATO軍に空爆された建物がそのまま残されていたりするなど、あの紛争を「記憶」する建物が多くありました。

～長距離旅行を終えて～

ユーゴ紛争が終わって約25年も経とうとしています。25年たつ今でも、紛争の凄まじさが伝わる建物や記念碑が沢山あることが分かりました。紛争を経験していない私たちがこれらをどう捉えるか。そしてその紛争から私たちは何を学び、生かしていくのか。凄惨な紛争を風化させることなく人々の心に「記憶」させるためにはどうすべきなのか、をととても考えさせられた旅でもありました。今では紛争から立ち直り、バルカンの国々は少しずつ成長を遂げています。ぜひ皆さんもバルカンの国々へ旅行してみたいはいかがでしょうか。



サラエボのスプレニツァ祈念館の展示